

[書評] 『昆虫食と文明』 デイビッド・ウォルトナー＝
テヴス著 片岡夏美訳 築地書館 366pp. 定価 2700 円

竹田 真木生

数日前、徳島大にベースをおく食用コオロギ生産工場を運営する Gryllus 社が従業員 150 名の解雇と 1 億 5000 万円の負債を残して倒産というニュースが流れ、波紋が広がった。私の方もずっと小規模だが、コオロギの食糧化を目指してやってきたからよそ事ではない。G 社は大型経営で驀進してきたが、当方は、タガメや蛍の保全を目的としてコオロギ生産を通じた山村経営の補助としての産業システムの構築であるから、冬の低温（すなわち電気代）に悲鳴を上げて、どこか温暖地に生産拠点を移すというような手立てはないわけであるが、過疎化に抗する起死回生策として村ぐるみの取り組みを目指したが、実際のところ、その母体となる青年層がすでに存在しないという現状で、生産性の向上と販売促進の両方で悪戦苦闘中である。2013 年 FAO の有名な van Huis 報告はリリース直後 600 万のアクセスがあったという。昆虫食のアドバンテージはそこでまとめられたように①餌の同化率が脊椎動物より優れている、②水の必要量も圧倒的に少なく済む、③栄養価も遜色ない、④ Ca, Mg の含量が高い、⑤すでに世界各地で食用に供せられている（即ち治験段階をへている）、⑥飼育のための面積が少なく済む、⑦排せつ物の処理が容易、などが強調された。そうした十字軍的な精神は、納得されるが、しかしながら昆虫を食するということには、まだまだ西洋社会（日本も含め）には受け入れがたい精神的なギャップが存在するし、採集する場合には生物多様性保護との矛盾も起こるだろう。また、現在はグレーゾーンになってはいるが、食用だから、安全性の検証ということもワクチンの使用でおなじみの問題がある。本書の著者は国境なき獣医師団の創設者として獣医学的立場から人類とそれを取り巻く生態系の未来像を考える立場で、今回は昆虫食にかかわる様々な視座から昆虫食の推進のために考慮すべき文化、倫理、衛生的な側面だけでなく動物福祉や生態系とのかかわりを哲学的に考察する。因みに著者の前著には「排泄物と文明」がある。進化システムをどう内在化するかという問いも発している。①から⑦の意義をとらえて、何か、宗教カルト的、説教的な立場を説くだけで昆虫食の道が開けるのか？こういう地平を越えて、食べるということの意味、食べられるということの意味、共生的関係の意味などに根源的な問いを発していてこの部分は面白い。やや翻訳文が生硬で、意味の採りにくい箇所がいくつかあったが、原題は “Eat the Beetles ! An Exploration into Our Conflicted Relationship with Insects” で、「昆虫食と文明」とするのはやや文化人類学的すぎる treatise であり、本筋は

An Exploration…であろう。Beetle というのは Darwin や Haldane の言説を踏まえている。私の方のシステムは、クリケット・ファームの他に、オオムラサキ、テングチョウ、ヤマユガ、柞蚕、ウスタビガ、カブトムシのケージとミツバチの巣箱を併設し、子供たちに生きた大型種を触ってもらうようにしているが残念ながら訪問者は多くない。こうして、昆虫が経時的にどのような発生トラジェクトリーをとって大きくなっていくのか子供たちが手に取って見ながら、昆虫食を味わい、観察し、考察する貴重な機会と思うが、新聞社も佐用町も、教育委員会も、農業科学科を持っている佐用高校も、昆虫館スタッフも殆ど興味を示さない。知らないうちに外界の昆虫相は急速に減衰していて、アメリカでもそのような印象を受けたから、これは世界的な傾向であろう。オオカバマダラが激減しているのが一例。今年、アメリカ中西部で、以前にはどこにでもいたアメリカシロヒトリを採集するのに一苦労した。何か違う世界がやってきているような嫌な予感。ムシも鳥も花も、カタツムリも、ミミズもすべていなくなってから後悔してももうどうにもならないのに。ミミズだって、お螻蛄だって、アメンボだって、みんなみんな死んでしまった、どうにもならないよ、とうたうだけ？食糧問題の解決という視点だけでなく、昆虫食についても、昆虫とヒトの関係性をよく理解する手がかりにし、子供たちに学ぶ機会を与えることが出来るから、大人が、積極的に実践し、大事な考え方を伝える努力をしていくべきではないだろうか。大事なことは評論ではなく実践である。世界はもう崖っぷちに来ている。食育の学習時に mindful eating という言葉がよく出てくるが、mindful の及ぶ範囲は、栄養学的な範囲、健康維持の観点までで終わりではなく、ヒトが、凶悪な暴食者であるという認識も含め、人類としての生死観や、それがバイオスフェア全体に及ぶところまで徹底した思考の訓練が必要である。今、人工知能などというバーチャルな情報の雲の中に人類社会は突っ込んでゆく。掌で触り、眼で見て、においをかいで、そして、なめて食べてみて、それらの存在の実相と、言葉の意味の確認こそ、子供たちの早い段階の教育としては重要ではないだろうか？昆虫食もそうした自然認識、自己認識の作業のとば口にあるよい教育材料なのではないだろうか？Gryllus 社の失敗は、コオロギを、低所得者向けに腹いっぱい低価格メニューとしてビッグマック並みのサービスを提供しようとしたのと同じ精神性を振りかざしたところに起因するのではないだろうか？ビッグマックを食べるときに 4 脚の動物を想像する人は少ないだろう。しかし、そういう想像力が現在求められるのではないだろうか？ヒトの種として decency が。

(Makio TAKEDA ピノキオ幼稚園 (熊谷市))

・昆虫資源研究所 (佐用町))